

中東紛争

イスラム過激派の系譜から
ガザ危機・シリア革命の深層まで

黒井文太郎

激動の 中東現代史 を 1冊に凝縮!

アルカイダとイスラム国のテロ攻撃
イスラエルの行動原理
ガザ紛争
シリア解放...

ニュースの深層にある「中東の論理」を徹底解説!

中東紛争

イスラム過激派の系譜から
ガザ危機・シリア革命の深層まで

黒井文太郎

星海社

336



SEIKAISHA
SHINSHO

中東は今も戦乱の中にあります。

ガザ地区では、2023年10月7日にパレスチナ人組織「ハマス」の武装集団が、地区を囲む壁を壊して周囲のイスラエルの町を襲撃し、約1200人を殺害し、約250人を拉致しました。イスラエル軍はすかさずハマス殲滅のためにガザ攻撃を始めましたが、ハマス戦闘員は住民の中に紛れているため、ガザ住民ごと町を破壊する殺戮を行ない、本稿執筆の2025年3月時点で、人口およそ200万人のガザ市民のうち4万8000人という死者を出しています。

また、このガザ紛争をきっかけに、レバノンの民兵組織「ヒズボラ」がイスラエルを攻撃。双方の攻防はやがてイスラエル軍のレバノンへの大規模な空爆にエスカレートし、4000人以上が殺害されました。

ヒズボラは同じ宗派のイランの事実上の指揮下にあるので、ヒズボラを背後で操るイランとイスラエルの緊張も高まります。シリアを活動拠点にヒズボラやパレスチナ武装組織を指揮するイランの秘密工作機関「コッズ部隊」将校をイスラエル軍は殺害していきませんが、2

024年4月には彼らが会合していた在シリア・イラン大使館付随施設を空爆したことで、イランとイスラエルが初めて直接、互いにミサイルで攻撃し合うという事態になりました。同年9月にイスラエル軍がヒズボラ最高指導者を殺害したことで、双方は2回目のミサイル攻撃の応酬おうしゅうに至っています。

イランはかねて核兵器開発を行なってきましたが、イスラエルや米国の反発を警戒し、兵器化の一步手前に留とどめてきました。しかし、イスラエルとイランの緊張激化で、イランがいよいよ兵器化に踏み出す可能性があります。また、イスラエル国内では、ハマスやヒズボラを叩いた勢いで、自分たちにとって最大の脅威であるイランの核開発施設を「さっさと攻撃してしまえ」との声も高まっています。

イスラエルを攻撃している勢力は他にもあります。イエメンの「フーシ派」という新興勢力はイランのコッズ部隊から軍事支援・指導を受けており、おそらくコッズ部隊の指示でイスラエルをミサイルやドローンで攻撃しています。フーシ派は「イスラエル関連船舶を攻撃する」として紅海かいきょうの海峡を通過する船舶への攻撃を始めましたが、やがて西側の船舶に標的を拡大。欧州からアジアへ向かう船舶が紅海を通れなくなり、南アフリカまわりとなって物資の輸送費こうとうひが高騰するなど、日本にも大きな影響が出ています。

シリアでも2024年12月に大きな出来事がありました。父子2代で54年間にもわたる恐怖支配の独裁体制を敷いてきた「アサド政権」が、反体制派「シャーム解放機構」(HTS)

を中心とするゲリラ部隊の蜂起によって打倒されたのです。同国では2011年の「アラブの春」で民主化運動が発生し、それを独裁政権が武力で弾圧したことで激しい紛争となり、60万人以上が殺害されるという21世紀最悪の大虐殺ぎやくさつが起きていたのですが、そんな最悪の独裁政権がようやく崩壊しました。殺戮が続く中東での唯一の明るいニュースといえます。

もつとも、中東の戦乱は現在だけの話ではありません。中東の歴史では、地域全体が平和だったことはありません。第2次世界大戦後を振り返るだけでも、中東はまるで現代の戦国史のような様相を呈しています。紛争が生まれる要素は、大きく分けると4つあります。

1つめは、宗教です。中東にはさまざまな宗教社会がありますが、宗派集団同士による抗争が起きることがあります。たとえばレバノンでは、キリスト教マロン派、イスラム教のスンニ派、シーア派、ドルーズ派などが争って長く内戦化したことがあります。

宗教系抗争の起爆剤として特筆すべきは、イスラム教スンニ派の過激派の系譜です。中東ではスンニ派が多数派ですが、彼らの中から戦闘的グループがいくつも誕生してきました。「モスレム同胞団」「ジハード団」「アルカイダ」「イスラム国（IS）」などです。多くの場合、こうした過激派は突然出現するのではなく、人脈が連綿と繋がっています。

2つめは、イスラエルの建国です。もともとアラブ人が住んでいたパレスチナに、第2次世界大戦後にイスラエルが建国され、パレスチナ人を追い出しました。イスラエルはアラブ人社会と敵対し、幾度も「中東戦争」が起きました。

また、追い出されたパレスチナ人の側は抵抗闘争を始め、かつてはPLO（パレスチナ解放機構）らのパレスチナ・ゲリラがハイジャック闘争など激しい戦いを挑んできました。なんとか互いに妥協して共存できないかと調停の試みが何度かありましたが、失敗しています。今でもイスラエルは占領地でパレスチナ住民を弾圧し続けていますし、パレスチナ側ではハマスなどが前述した奇襲テロなどを行なっています。

3つめは、独裁者たちの蛮行です。中東の多くの国は、今でも非民主的な独裁国です。そんな独裁政権の中に、他国に脅威を与えてきた国々があります。

たとえばイラクのサダム・フセイン政権はイラン・イラク戦争を仕掛けたり、クウェート侵攻から湾岸危機・湾岸戦争を引き起こしたりしました。また、そのフセイン政権に加えて、シリアのアサド政権やリビアのカダフィ政権などは、権謀の一環として外国のテロ組織を支援しました。

さらに多くの独裁政権は、自由を求める自国民を過酷に弾圧してきました。叛乱はんらんが起きたイラク、リビア、シリアなどでは、独裁政権が自国民を大規模に殺戮しました。あるいはイエメンはかつて冷戦時代に南北に分裂した国でしたが、冷戦終結後は権力層の争いで内戦化しました。これも「権力者」たちが紛争の主原因になっています。

4つめは、イランの対外工作です。1979年にイスラム政権になったイランは「革命の輸出」かかを掲げて、国外に自分たちの勢力圏を広げる対外工作を続けてきました。実際、現在

に至るも中東のさまざまな抗争の裏で、イラン工作機関「コッズ部隊」が暗躍しています。彼らは自分たちの謀略をイスラム革命の大義としており、謀略の熱情は一向に衰えを見せません。

2020年代半ばの現在、アルカイダとI Sがピークを過ぎたイスラム教スンニ派の過激派は、活動退潮期に入っています。独裁者もサダム・フセインがイラク戦争で、カダフィが「アラブの春」の内戦で、アサドが反体制派の革命で打倒されており、今は大規模紛争の主役というほどの存在は見当たりません。

現在の中東の紛争では、イスラエルとイランの存在感が突出しています。そんな現在の「紛争の構図」と、ここに至るまでの経緯を振り返ると、そこにはさまざまなキーマン、すなわち重要な役割を果たした人物たちがいたことがわかります。中東の紛争史は、人間たちの思惑がぶつかり合うドラマの連続でもあるのです。

目次

はじめに 3

トランプ大統領が掻きまわす中東

序章

第1期トランプ政権の中東政策 21

親イスラエルと反イスラム、陰謀論のエコーチェンバー 23

シリア独裁を倒した

元ジハード戦士・シャーム解放機構の奇跡

第1章

アサド家のシリア独裁は恐怖政治で成り立っていた 29

民主化デモの武力弾圧からシリア内戦へ 34

敗勢のアサド政権に力を与えたイランとロシア 38

イスラエル・ハマス紛争の間隙を衝いた反体制派の奇襲 42

反体制派「奇跡の勝利」の理由 45

シリア新政権のもうひとつの奇跡 49

シャーム解放機構と司令官シャラアの過去 51

新生シリアの今後はどうなる 59

レバノン・ポケベル爆弾の衝撃と イスラエル情報機関・モサドの暗躍

第 2 章

モサドの周到な破壊工作は10年前から計画されていた 65

モサドのバルネア長官の人物像 69

工作機関の暗躍がイスラエルの戦争犯罪を支えている 71

イラン破壊工作機関・コッズ部隊 & ヒズボラ VS イスラエルの攻防

イラン配下のレバノン民兵「ヒズボラ」とイスラエルの抗争史 75

ハマスのイスラエル奇襲により、戦いは新たな段階へ 78

イスラエルとイランの直接対決へ 82

イスラエルの強烈な攻勢でヒズボラは壊滅状態に 87

レバノンの親イラン組織・ヒズボラとは何か 93

殲滅されたヒズボラ軍事部門 97

イスラエルの報復攻撃はどこまで続くか 100

20世紀中東戦国史

105

イスラム・テロ・ネットワークの現代史

第4章

イスラム過激派組織の起源・モスレム同胞団 108

第1次中東戦争が生んだ元祖「イスラム過激派テロ」 111

第4次中東戦争後、イスラム過激主義が伸長 114

イスラム過激主義がエジプトから世界に拡散 119

イスラエル建国と

中東紛争の本丸・パレスチナ問題

第
5
章

イギリス統治下パレスチナのユダヤ人自警団⇨武装組織 122

イスラエル建国とパレスチナ弾圧 126

20世紀イスラエルの指導者たち 129

21世紀イスラエルの指導者たち 136

パレスチナ・ゲリラたちの戦い

第
6
章

140

120

イスラエル建国前後のユダヤ人・アラブ人の衝突 140

パレスチナ闘争の中心人物アラファト 142

KGBや各国の極左の支援を受けたパレスチナの極左テロ 145

PLOは穏健路線に転換し、過激派組織はアラブ諸国の支援で活動を続ける 148

反イスラエル闘争の主役はPLOからハマスへ 151

イラン革命とホメイニの暗殺部隊

第7章

154

イラン革命政権が「革命の輸出」を唱える 155

最高指導者ホメイニの門下生が中東各国で工作活動へ 157

「殉教の論理」でイスラム過激派テロは新たな時代へ 162

1990年前後にピークを迎えたイランの過激派テロ 165

第

3

部

蠢く地下テロ水脈

183

湾岸戦争後、イランのテロ・ネットワークは中東全域に拡大
「テロの黒幕」コッズ部隊と「下請け機関」ヒズボラ 173
168

アルカイダとつながる
反米イスラム人脈

第
8
章

スンニ派と米国の微妙な関係
184

ハマス軍事部門の真相

ソ連のアフガン侵攻と戦うジハード戦士たち 186

行き場を失った義勇兵をスーダンで組織したビンラディン 191

アフガニスタンに拠点を獲得し、聖戦に乗り出すアルカイダ 196

対米テロの首謀者ハリド・シェイク・ムハマド 201

「世界の中心でジハードを叫ぶ」壮大なテロ計画 206

9・11後のアルカイダの名声と衰退 210

パレスチナ抵抗運動の中心は左翼からイスラムへ 217

政治部門と軍事部門を分離したハマスの巧妙な組織運営 219

ハマスとPIJがイランの影響下に 222

自爆テロ攻勢を続けるハマスとファタハの決裂 224
封鎖されたガザ地区からのロケット弾攻撃へ 229

第 10 章

イスラム国成立とスンニ派過激主義の盛衰

232

イラク戦争後のイラクの勢力図 232

スンニ派武装勢力「イラクのアルカイダ」が「イスラム国」に 235

米軍撤退後に存在感を増したイスラム国 239

シリア内戦で戦力を強化し、イラクを席卷してイスラム国家を自称 243

米軍の介入で急速に衰退 248

ガザ戦争　ハマス、イラン、イスラエルの“死闘”の深層

終章

252

コッズ部隊司令官・ソレイマニの暗躍 253

コッズ部隊の工作は「革命の輸出」のため 258

2023年ハマス奇襲の衝撃 260

なぜ奇襲が成功したのか 262

イスラエルとイランの対立は続く 266

トランプ大統領が掻きまわす中東

「米国がガザ地区を所有する」

2025年2月4日、イスラエルのベンヤミン・ネタニヤフ首相とホワイトハウスで会談した後の記者会見で、トランプ大統領の口から驚くべき言葉が飛び出した。

「米国が引き取って、破壊された街で不発弾処理をして更地にする。そしてリゾートとして開発する」

「住民は他のアラブの国々に引き取ってもらう。その費用は中東の裕福な国々が負担すべき

だ。そのほうがガザの人々も安全で快適な暮らしができる」

「ただし、彼らは戻るわけにいかない。戻れば、同じような悲惨な状態が数百年も続くだろう」

ガザには現在、180万人以上が暮らしているが、彼らを全員追い出すというのだ。これは、パレスチナ全体を「ユダヤ人が神から与えられた土地」だと主張するイスラエルの宗教右派の政治家がよく言うことだが、ガザ住民は怒り心頭であり、しかも周辺国はどこも受け入れるはずがない。

トランプとしては最高のアイデアを思い付いたと思いつているのかもしれないが、そんな思い付きで振り回される側はたまらないだろう。

中東の問題にかぎらず、グリーンランドを買ったと言ったり、パナマ運河を奪還すると言ったり、24時間でロシア・ウクライナ戦争を停戦させてみせると言ったりと、思い付きで突飛なことを次から次へと言い出すトランプ大統領の登場で、世界は翻弄ほんろうされまくっている。

では、実際、トランプ政権は中東でどんな政策を実行していくのか。

たとえば、2017年1月から4年間の第1期トランプ政権の中東政策は、きわめて特殊なものだった。トランプは自分のやったことはすべて最高のデール（取り引き）だと考えるタイプの人物なので、第2期政権でも基本的には前回の路線を踏襲する可能性がきわめて高い。

第1期トランプ政権の中東政策

イスラエル・パレスチナ問題に関しては、一貫して徹底したイスラエル支持である。第1期政権時には、その地位をめぐって両陣営が対立しているエルサレムをイスラエルの首都と認め、米国大使館をテルアビブからエルサレムに移転した。また、国際的にはシリアの主権が認められているイスラエル占領下のゴラン高原を、イスラエル領と認めた。

さらに、イスラエルが求めていた湾岸アラブ諸国との接近を後押しし、アラブ首長国連邦(UAE)との国交正常化のアラハム合意を仲介した。アラハム合意はその後、バーレーン、スーダン、モロッコとの国交正常化に拡大。サウジアラビアとの交渉も進めた。

第1期トランプ政権では、トランプの娘婿のジャレッド・クシュナーを上級顧問に迎え、中東政策を主導させた。クシュナーは父親がネタニヤフ首相の後援者でもあった実業家で、トランプ政権はネタニヤフと特別な関係を築いた。

それに、もともとトランプは米国社会で強い影響力を持つ右派勢力であるキリスト教プロテスタント系の福音派が支持基盤だった。福音派は在米ユダヤ人以上に親イスラエルであり、トランプ自身も当然、元来からイスラエル寄りの姿勢だった。

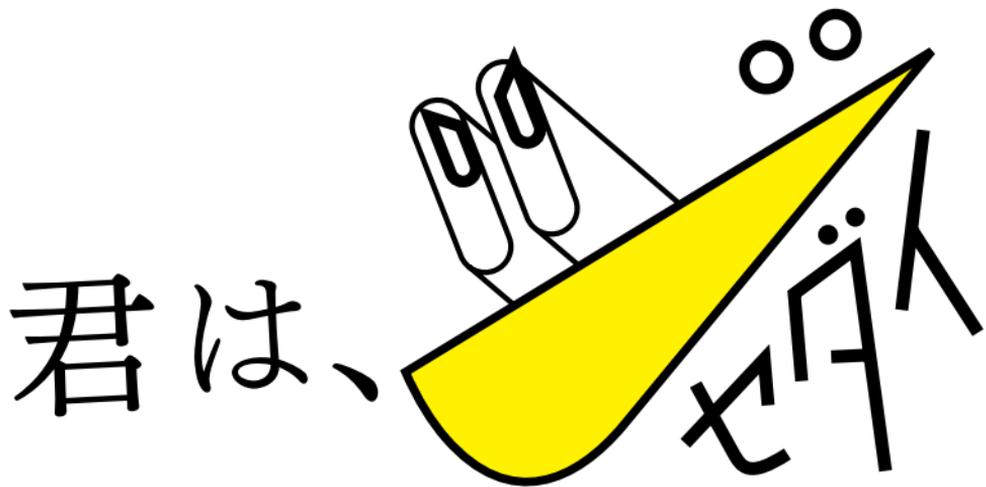
白人至上主義者も多い米国の政治的極右勢力と親和性の高いトランプは、もともと有色人種系の移民に強い反発を示しており、イスラム教徒移民にも厳しい立場だった。とくにイスラム主義には激しい敵意を明らかにしており、当然ながらイスラム過激派の根絶にはこだわ

った。第1期政権では、中東には他にもさまざまな問題があったが、IS殲滅は常に最優先した。

反イスラムの延長で、ISに続いてトランプが絶対的に敵視したのが、イランである。トランプはオバマ前政権の政策を全否定する延長で、オバマがEUや国連とともにイランと結んでいた包括的共同作業計画（JCPOA）を破棄した。これは、イランが核計画を抑制することと引き換えに、同国への経済制裁を解除する、いわゆる「核合意」と呼ばれていたものだが、これを破棄して経済制裁を再開した。

オバマ前政権の否定ということでは、シリアへの空爆も行なった。シリアのアサド政権をめぐっては、オバマ前大統領は「アサド政権が化学兵器を使用したらレッドラインだ」と公言していたものの、実際にサリンが使われても軍事介入を躊躇ちゅうちよした。トランプはオバマ批判のパフォーマンスで、アサド軍が化学兵器を使った際に、米海軍に関連基地・施設へのミサイル攻撃を命じた。

もっとも、トランプはシリアの民主化などに興味はなく、それ以上の介入はしなかった。米国ファーストを掲げるトランプからすれば、カネの余計な持ち出しになる外国への軍事介入は、米国の利益にならないということだ。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!